経営の散歩道

桐生市商業の明るい未来

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

西の西陣、東の桐生

西の西陣、東の桐生と並び称せられた桐生市は、わが国屈指の織物の産地であり、一二〇〇年の伝統が今も輝く貴重な都市だ。近年は、機械工業や全国一のシェアを誇るパチンコ台産業、バイオ産業などの進出も目覚ましい。

人口一一万六〇〇〇人、老人人口は群馬県でも上位、公民館や幼稚園は県下で、もっとも充実している。市民性はどちらかと言えば開放的。酒造りや絹織物の関係で、昔から滋賀県や新潟県などからの移住が多かった。町の一部が、かつては彦根藩の所領だったこともある。

しかし、この町も日本のほとんどの町と同じように、市街地の拡散と市街中心部の空洞化が起きている。白壁の土蔵やのこぎり屋根の織物の工場といった趣の深い本町通りや、糸屋通りなど、伝統ある都市景観の個性を失いつつある。

その反省として、

(1)産業観光資源として満足できる体験型の仕組みは、ほとんどない。

(2)オンリーワン、テクニカル・ビジットの対象となる資源はあっても、それに触れられない。

(3)訪問者が時間消費できるシステムを持っていない。

といった点が挙げられ、商・工・農・サービス業などの産業間の相乗波及効果を意識した新しい構想がうち出された。

一店一作家運動

ファッションタウン構想を市と商工会議所は数年前から打ち出し、特に、産業文化景観都市をめざす具体的戦略を進めている。

この構想の具体化する上で、商業者の役割は大きい。

すでに一店一作家運動をくりひろげ、伝統ある絹織物を全面的に打ち出し、一つの店に一人の作家や工場を結びつける。店に作品のコーナーを設けて展示即売する。空き店舗を「桐生産地店」にして作家の作品を並べ、作家が出演する、といったユニークな活動が注目を集めている。

江戸時代からあった桐生川での友禅流しや、「紗綾市」、関東三大骨董市と呼ばれた「天満宮の古民具骨董市」も復活し、日を限って願いごとが叶うという「日限り地蔵尊縁日」には、大勢の人出で賑いを取り戻している。

産業観光ビジョン

産業観光ビジョンが構想の柱となっており、次の五つの具体目標を掲げている。

戦略1 物づくり歴史文化都市

●ものづくりの歴史と伝統を産業文化資源として街の誇りとし、桐生の個性として活用。

●祭りの充実　八木節祭りの更なる活性化を図り、市街の人も興味を持ち、楽しめる祭りに育てる。祭り舞台の復活、祇園祭りの活性化の検討。

戦略2 体験型工房都市

●桐生でしか体験できない、参加できない仕組み作り。

●消費者や観光客と桐生の産業を直結する仕組み作り。

戦略3 産業文化景観都市

●桐生新町ミュージアムタウン構想

北の極（天満宮を中心に直径約一キロメートルの範囲）を一つのミュージアムと見立ててミュージアムタウンのモデルとして総合的な整備を図る。

近代化遺産を修復し、地域産業工場、工芸工房、芸術アトリエ、ファクトリーブティック、ギャラリー、各種博物館、美術館などとして活用する。

●パーク・アンド・サイクルタウン

自転車や徒歩でラダー内部を回遊できるようにする。

戦略4 女性が輝く都市

女性が行きたくなるまち、そこではたらきたくなるまち、女性が主人公のまちづくり。

●女性が買い物しやすい店づくり、小さくてもくつろげるコミュニティーホテル、清潔で安全な公衆トイレ、女性が食べやす

い食べ物・レストラン・喫茶店などの充実。

●女性の働きやすい場づくり、保育園の充実、時間外保育システムづくり。

戦略5 コミュニケーションする都市

●産業界による観光起こし＝遺産の保存、人材育成などメセナ（一％基金）の仕組みづくり。

●産・学・官・民が連携して、桐生学を起こす（大学や会議所で講座を開設）。

有識者も特色ある専門店と街づくりを求めている。

増山作次郎・元桐生商工会議所会頭は、「小さくても特徴のある専門店の形成」と「特に後継者問題の重視」を望み、塚越平人・桐生瓦斯㈱元社長は、「近隣の諸都市に比べて高い食文化がある」と言い「食べに行ってみたい店、お客様を連れて行きたい店は、足利、高崎、太田、前橋、佐野の中で桐生が一番多い。創業三百年のウナギ屋もある。切り込みうどん、手焼き煎餅、和菓子、洋菓子などの店も恵まれている」とし、「街づくりから見た特性をだすべきだ」と提案している。

〈日専連桐生の挑戦〉

日専連桐生の挑戦が始まった。

会員目標は一万人、当面のカード売り上げ目標は一五億円、加盟店五〇〇店舗とし、法人カードを誕生させるなど、大々的なキャンペーンを計画している。

●旅くらぶを結成、第一弾として一一月二四日から三日間、彦根城と比叡山延暦寺の旅を実施した。

新年から新しい事務所がジョイタウン広場のビルに移る。これを契機に三六四日営業をめざし、大澤豊理事長を先頭に、武藤聰副理事長が実践責任者となり、小島勉事務局長らが、当面は無休の稼働体制をひいて万全を期している。

一〇月二三日と一一月一一日の両日に、群馬県中小企業団体中央会と共催で講演会を開き、「専門店集団の強い街は必ず活性化される」と題して、川中清司・日専連名誉講師と渡部章夫常務が担当した。

地元の桐生タイムスには、「日専連児童版画コンクール、桐生で初の県大会」との紹介記事も報道された。